

三國を統べて其の神威の下に我が國史の進展に多大の寄與を成されたのであつた。本書はその備前にある一宮吉備津彦神社を中心とし、舊社家の所有する文書類を蒐集したもので、中國隨一の大社を中心としての社務行政は勿論、地方の生活經濟を窺ふに足るは勿論、何分にも一大勢力である一つの吉備王國の史料であるから、事の中央政界に關する史料も極めて多い。

本社所有のものは文龜二年の神社縁起寫を初めとして、百二十一通の文書を收め、舊社家のものとしては、社務大守家文書六十四通、左行事大守家文書二通、三老和氣島家文書二通、一禰宜小山家文書十通、七禰宜深井家文書二通、金山寺文書五通、弘法寺文書安養寺文書水原家文書各一通、尾上村大庄屋則武家文書十四點を收め加ふるに十三葉の挿入圖版がある。

本社の文書では、やはり寫眞として挿入されて居る吉田兼右と大内義隆との神道問答書とか、天文十三年七月吉田兼右自筆の龜卜次第とか、天文二十二年八月の足利義藤の一日も早く入洛せしめば、代官兼右を以て參宮すべしとして伊勢大神宮に立願した願文の如きは、中國筋に對する吉田神道の勢力増進を見るに足るべく、御神事繪卷の一卷は、さうまで古い資料ではないけれども、近時神社の特殊神事が大に研究されて居る際とて、其方面研究者へのアトラクトであらう。社務大守家文書の中には足利義詮・足利持氏以下戰國諸侯の感狀があるが、吉備津の社家が又一面に於て、一かどの武將としての勢力を有したものである事を暗示するものであり、文龜元年五月一日の吉田兼右

が關白一條兼良に神道の祕事を授けた傳授狀の如きは珍中の珍である。

又本社及び各舊社家等が大抵十二點宛所有する吉備津社の縁起の中には、荒唐な物語もないではないけれども、其中から地方人士の舊い信仰の佛を求むる事が出來よう。

かうした文書が、上梓される事は學界のために最も慶賀すべき事であると共に、此の多數の史料を整理印刷された廣野三郎氏の勞力を多とし、又出版の援助を惜まれなかつた黒正巖博士の義舉に感謝するものであるが、同時に一般に公刊して學界人の手にする事を容易ならしめなかつた事に遺憾の念を表する。

(岡山、御津郡一宮村、吉備津彦神社發行、非賣品)(中村)。

○阿蘭陀風說書の研究

日本古文化研究所報告 第三

板澤 武雄 著

阿蘭陀風說書とは徳川時代長崎に入港するオランダ船が毎回幕府に呈上した海外情報である。蓋し徳川幕府は吉利支丹禁止の必要から遂に世界史上他に殆んどその類を知らぬほどに嚴格なる鎖國を斷行するに至つたが、實はその目的を徹底せしめる爲にも海外に於ける彼等の動靜は之を知る必要があつた。この目的の爲に利用せられたのが、ヨーロッパ人中唯獨入國を許されたオランダ人であつて、彼等は長崎に入港する毎にその地の奉行を通じてキリスト教國民、就中ポルトガル、イスパニア兩國

人の動静を上告しなければならなかつた。然も時代の降ると共に幕府の欲する報導の範圍は漸く廣くなり、彼等の上告するところもヨーロッパ、インド及び支那各方面の狀勢に互ること、なつた。而してこの上告文こそ鎖國時代幕府當路者が海外の形勢に就いて有し得た知識の殆んど唯一の根源であり、幕末外交問題の漸く紛糾するに至つて彼等の利用しえた最も根本的な參考資料であつた。従つてその研究は單に日蘭交通史や蘭學發達史の問題たるにとゞまるものでなく、近世日本の政治史・外交史の究明にとつて缺くべからざるものとなるのである。然るに従來その本文の世に知られたものとは僅に通航一覽に引用せられたものの總計五十通のみに過ぎなかつた。板澤武雄氏はこゝに鑑み、日本文化研究所の援助を得て、ハーグ國立文書館に藏せられる出島商館長の日誌の中よりそのオランダ原文を探索すると共に、學者院所藏の寫本荷蘭上告文を基として正保元年（一六四四）より延享二年（一七四五）に至る一世紀間に互る百八十五通を輯め、その蘭和兩文を對照せしめ、蘭文のみ存するものには譯文を草し、且つ全編に一々註を加へて之を解説し、更にその總説ともいふべき解題をも添へて本書を公にせられた。われ／＼は何よりもまづこの貴重なる史料の始めて學界の共有に委ねられたことを喜ばねばならない。

筆者は全編を通讀して一年乃至數年つゞ遅れて齎らされる簡單なる報文の中に、東漸し來る西方列強の勢力のあたかも遠く海鳴る潮音の如く次第に高まり來る狀を見て津々たる興味を感

じた。然も當時幕府當路者が果して如何にこの潮音を聞成したか——この風説の意味を果して如何に理解したかを想ひ願るとき唯歴史家のみよく事の意味を知るものなるを思ふのである。（四六倍版本文二八〇頁、解題・索引等三〇頁、東京丸ビル四階日本古文化研究所發行、非賣品）（柴田）

○奈良市史

奈良市役所編

本書は其の序文によれば千年の古都奈良市には其の歴史を語る史籍も尠なしとしないが、尙且つ一讀以て滿喫に足るべき簡要且つ統制ある奈良市史なきを遺憾として前市長森田宇三郎氏が其の編纂を企圖し、市會の協賛を経て京都帝國大學中村直勝助教授に其の編纂監修の事を依頼したものである。然して中村氏は同大學國史科卒業の新進學徒、向井芳彦、清水三男、澤井浩三三氏に依頼し資料の蒐集並に稿本の執筆をせしめたものである。爾來此處に數年を経て、其の間資料の蒐集、史實の檢討に該博なる知識と不撓不屈の努力を拂はれ、博引傍證然かも取捨選擇宜敷を得て簡要平易に悠久千年に餘る市史を僅々五百頁の冊子にまとめ上げたものである。

本書は全卷を三十九章に分つてゐる。其の大體を説明すれば第一章「ナラ」の名義と充用漢字。第二章「實部以前の奈良地方」に就いては取立て、云ふ程の事もない。第三章平城京都と其の意義以下第九章佛教藝術の隆盛迄は所謂奈良朝時代に奈良